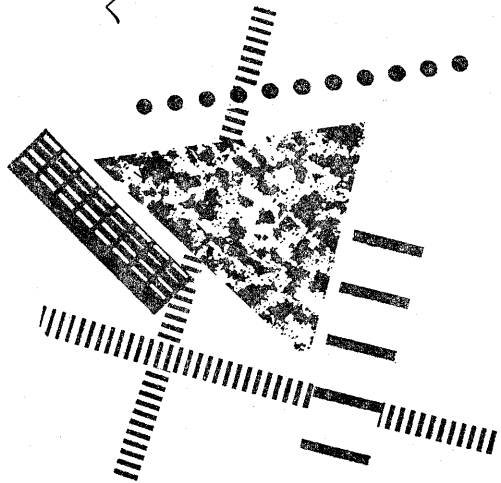


蔵前の保姆養成所をたずねて

——一台のオルガンから——

土屋とく



江戸川区小岩のつぼみ保育園に古びたオルガンが保育室の片隅に置かれている。

YAMAHYAの商標がかすかに読みとれるが、かなりの年代を経ていまは使われることも稀である。

さきごろ八十三歳で亡くなられた前園長の荒木直高氏が友人の多田元一氏より譲り受けて若い頃愛用されたものだという。

このオルガンをめぐって奇しくも大正期の幻の保育養成機関をたずねることになる。

それは昭和五十四年初夏のことであった。

一章 探 索

一 若き日の通学

多田氏はある時次のような件について荒木氏にその存

在を確かめたい意向を洩らされた。

姉に当る多田タメノ様——明治二十八年生——がふと「若い頃通った蔵前の保婦の学校は現在何という学校に当るのかしら」……

その言葉は荒木氏より更に土屋にもたらされ、併せてその頃の記憶内容をいくつか書きとめてある文書も手渡されたのである。

しかし既に六十数年前のことでもあり、また高齢ゆえ記憶も曖昧な部分が多いかも知れないがこの中から判断してほしいとのことであった。

早速日本幼稚園史等を繰ってみたが、はっきり実在したと断言なさっている蔵前の保婦養成所はどの文献にも見当らず、それらしき記載内容も全く無い。その後、津守、坂元先生をはじめ幾人かの方々にお尋ねしても御存じないとのことであった。

多田タメノ様の記憶

。小石川ノ春日町（文京区）近クノ餌幸町（富坂の境）カラ上野広小路ヲ経テ電車通りヲ厩橋マデ二年間

通学シタ。当時コノ道ニハ市電ガ走ッテオリ、電車賃

ハ片道五銭。往復デハ九銭デアッタ。シカン経費ヲ節約スルタメニ下駄履キノ徒走デ行キモ帰りモ全期間通シタ。

。厩橋迄行ツタノダガ養成所ヘ行クノニ橋ヲ渡ツタ記憶ハナク、スグ脇ニ一部煉瓦作りノ東京高等工業学校（蔵前工專といわれた現在の東京工大の前身）ガアッタ。

。養成所ハ木造デ狭ク運動場モ極ク狭イモノデアッタ。少シ遊戯ヲ教ワリ練習シタ。

。学校ハ公立デ授業料ハトテモ安カッタカ無料カデアッタ。但シ府立カ市立カハ判然トシナイ。私立デハナカッタ。

。入学資格ハ高等女学校卒業ガ条件デアッタ。ソノ学歴ハナカッタガ自分ハ生涯デ何か公ニ認めラレル職ヲ持ツ必要ガアルト考エ志望シタトコロ入学ヲ許サレタ。

。ハッキリシナイガ校長ハ巖谷小波先生デアッタヨウ

ニ思ウ。話ヲ聞イタ覺エガアリ偉イ先生デ驚イタ。久留島先生モイタ。

。音楽ハ山田耕筰先生ダッタ、学力ノ面デ苦シムコトガ多カッタガ特ニ音楽ハ全ク分ラナイノデ歌ウ時ハ仲間カラ外サレタ。

。ドウシテモ音楽ハツイテイケナカッタガ卒業証書ハ渡サレタ。シカシ自分デハ保姆トシテハ一人前デハナイト思イ生涯幼稚園ニハ勤メナイトソノ時決心シタ。

。養成所ノ生徒ハ少ナカッタ、同級生ニ林田サンガイテ本郷教会ニ通ッテイタ。

。音楽ノ練習ノタメオルガンヲ購入シ家デハヨク弾イタ、マタ姪達ニ讚美歌ヲ教エタ。

以上が文書の大要である。この時のオルガンが前記のものであり、タメノ様が後に大阪在住の間は元一氏の許に、更に度々の引越しを経て妹様の嫁ぎ先の香川県の長福寺にも渡っている由。多田家にとって由緒あるオルガンがまわりまわって保育園に贈られ現在に至ったという

わけである。

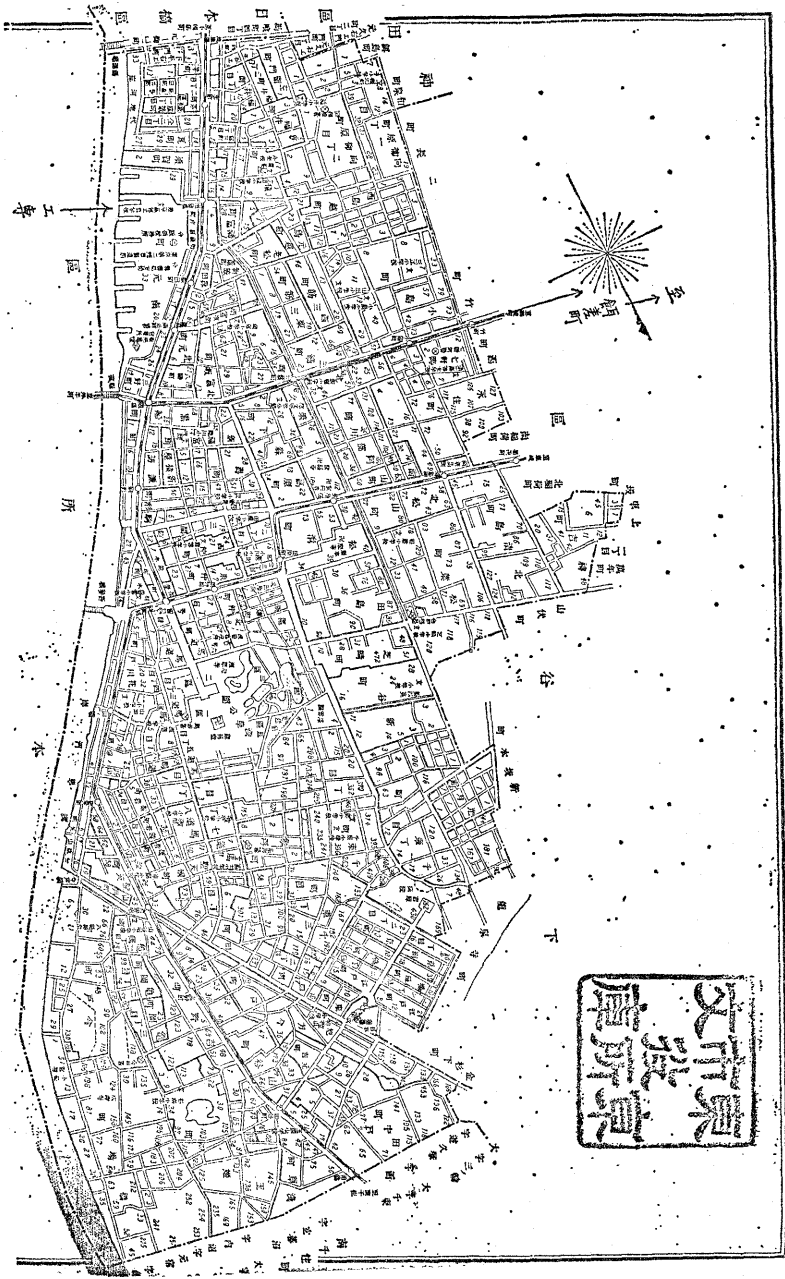
タメノ様は高齢のため視力や耳が弱られ、それでも新聞や本をよく読んでいろいろな事を知っていると共に話題にも出されるが、遠い過去の事を詳細に思い出すのは難しく問いつめると混乱しわからなくなるとのこと。

これ以上の手がかりを得るのは無理のようであった。

二 学校の所在の確認

これらの内容から時代を溯って事実との照合を試みる。現存したはずの学校の確認はまず限られた資料の中から所在を確定する作業から始められた。

特定の学校を指す場合、正式の呼称を使わずその所在地の名で学校そのものを表すことがよくあるものである。例えば東京女子高等師範学校は現在の医科歯科大学の所にあつたため「お茶の水」とよばれ、日本女子大学は「目白の女子大」といった風に……。したがって蔵前の保姆養成所も実在したのなら正式の呼称はほかにあり、何らかの記録の中にその痕跡が残されているに違いない。



東洋文庫
藏所

地図
1

ない。

A 通学路からの追跡

学校の位置は通学した路と周辺の状況が当時のものと一致することが必要である。当時とは少女期から推定するところ明治末期から大正の初期にかけてと考えられる。

この時期の地図や資料は、資料そのものが乏しい上に該当地図が関東大震災、更に大平洋戦争の空襲と二度に亘る災害を被むっている関係上著しく制限されたものになる。

やがて東京都公文書館で——大正初期——「東京地籍地図」を探り当てることが出来た。

因みに地籍地図とは、ある土地の所有者は誰なのかその所屬を明確にするための土地台帳であり、公文書館担当者の言によれば震災前の詳細な地図的記録は現在これのみということであった。(地図1)

この地図で通学路を辿ると小石川餅差町から春日町の交差点(現文京区役所は砲兵工廠)を北へ向い——真砂

町——本郷——本富士——湯島を経て御徒町——更に西

町——七軒町——森下町——八幡町に至り厩橋の手前で三好町との交差点となる。

タメノ様が橋を渡った記憶がないということからすると、右折か左折かする筈である。

だがこの周辺に学校らしき表示は見当たらない。この地域のもっと詳しい地図がほしい。続いて各区別の地籍地図を調べると「浅草区」の中に果してこの交差点を右折してしばらくの左側に、一部煉瓦作りであったという東京工専「文」の表示がみつかる。

隣接の建造物は厩橋税務所 東京第二煙草製造所及び専売局支局 南元町署 東京電燈発電所等であつたらしい。

このあたりは江戸時代主要な運搬系路であつた隅田川のほとりに幕府直轄の蔵が五十余棟並び立ち、その前に当る場所及び周辺を指して「蔵前」と言つたところである。そして維新後明治政府によって官有地となり国や公



(地図 2)

の建物が作られていったようである。

東京工専の所在は通学路から確認されたとはいえ、養成所はその隣接地にあったということであるから「文」の表示はもう一つなければならぬ。だが、この地籍地

図には一方が御蔵前片町の記名と空地があるばかりである。当該地区は浅草区南元町となるのでその部分地図を開くと今度はなんと東京工専の字も消えている。(浅草

8 南元町 地誌)

この線からの追究は完全に壁につき当たってしまった。

B 学務兵事記録から

一方その時代の学事関係の古い資料を明治から大正にかけて繰っていく。東京の公文書は達筆な筆書きで役所に届けられた書類にはきちんと整えられてあった。その中には学校の設立認可、採用者の氏名や勤務条件、月給の額などものっており、その頃の教育事情を知るには格好のものである。

しかし繰返し何度みても養成所関係のものはない。殆どあきらめかけたが猶もう一度と年代の幅を拡げて大正末期迄見ていくと何冊目かの綴りの中に次のようなものを発見する。

大正十四年 学務兵事課

市立学校 第一種 冊の十七

「柳北小学校狭小ノタメ位置変更届」この書類に添付されていた市街地図に、浅草区御蔵前片町二十三番地、即ち東京工專の向いに当る場所に明らかに「文」の表示がつけられているのである。敷地は長方形でさして広くは

ない。(地図2)

これで地図による所在の確定はほぼ間違いない出来たといつて良いであろう。

推測するところ、この表示が養成所につながるかなり信憑性の高い解明の糸口になるのではないかと思われる。

ただAの地図が震災前のものであり、Bが震災後の地図であるという点で時期的な隔りとその間にあったであろう事実の推移は何なのか疑問は増したといつてもよかつた。

三 柳北小学校と柳北幼稚園

さきの「文」表示は養成所そのものなのか関係の如何が次の課題となった。調査の場は東京都の公文書館から台東区立図書館に移される。浅草区は戦後下谷区などと共に統合改名されており、資料はこちらに集められているからである。教育史、浅草区史の中から御蔵前片町二

十三番地所在の学校を二つ見つける事が出来る。一つは現在の蔵前幼稚園の祖に当る「柳北幼稚園」一つは都立台東商業学校につながる「柳北実技女学校」である。両者は共に柳北の文字を冠しているが、いずれも私立である。

前出の柳北小学校は同じ柳北であるが市立でその所在地は浅草区向柳原町でかなり離れた位置にある。―地図2参照―

この三者の間には何かつながりがあるのか全く別ものなのか事情を詳しく探ってみなければならぬ。

ここで時代は大きく明治初期に遡る。
明治三年浅草区に先ず西福寺（現清澄公園隣り）に東京府第五小学校が仮設され、後に浅草向柳原町一丁目四番地の元幕府医学館跡に移転し、松前小学校と改称された。そして同九年にその隣接地一丁目六番地に女子のみを収容する第五中学区十四番 柳北女学校が出来た。

この学校はやがて柳北小学校と改称するが、二十三年には校内の一部を保育室に当てて、「市立柳北女子尋常

（四年）高等（二年）小学校附属幼稚園」を誕生させている。園児は三十二名から始まり十一月には八十名に達したのが保育室を三室に増やし保母を三名置いた。更に次第に入園希望者が増し幼児百二、三十名となったのでそれ以上は謝絶する有様であったと記録にある。

明治三十年代の同区内の幼稚園は他には松濤町四十番地本願寺境内の私立徳風幼稚園があるのみであった由、幼児教育に対する関心が高まった時期に当るのである。

同四十一年学制改革が行われ義務教育の年限が尋常小学校六年に延長、男女共学と定められたので、この学校にはわかに狭小になってしまった。高等科は切離されて精華高等小学校に集められたが、以上のような事情から浅草区議会は幼稚園を廃止することに決め、翌四十二年十一月三十日市立柳北附属幼稚園は失われる。

しかしながら盛運にある幼稚園を廃し、一朝にして幼児を解散させるのは教育上最も遺憾なことであると、当時の区議員や小学校長が発起人となって寄付金を募り新

たな幼稚園の設立と運営に尽力することになる。

この挙に賛同する人は多く蒔田、小川、杉浦氏の区議のほか長岡区長、三田校長また所有地を提供した安井氏の名と共に、区は従来使用していた器具機械等の園具はすべて無償で下附し事業を奨励したと記されている。

浅草区御藏前片町二十三番地（現藏前一ノ十）

私立 柳北幼稚園の創立である。開園は四十二年十月一日 園児百五十名の出発であった。次で四十四年には女子教育の必要性から私立の柳北実技女学校がこの地に設立され、幼稚園は同校の附属となっている。

参考迄に述べると実技学校は修業年限四年 学級数四、学科は修身・国語・算術・家政・裁縫外九科目となる。しかるにこの学校はやがて経済的困難に陥り、大正八年社団法人 浅草区教育会に移譲され校名を女学校は浅草家政女学校に、幼稚園は柳北実技女学校附属浅草幼稚園。十一年には浅草実科高等女学校、同附属浅草幼稚園に変えている。

十二年東京地方を襲った関東大震災により両校園共焼

失、その後区画整理により換地復興の上再開 園児九名……。

長い歴史の流れのうちに幾多の変遷があり、戦後幼稚園は学校法人に、女学校は都立高校となるのである。

このように御藏前片町の文表示の意味を尋ねていったが、女学校と幼稚園の存在は特定出来ても保姆養成につながると思われるものは出てこない。実科女学校の講義の内容をみても一般婦女子への教養科目の域を出ていないし、幼児教育を専門とする情況は何もない。まして入学資格である高等女学校卒業後の教育機関ではなさそうである。

つながるかにみえた頼りの綱はここでまたとぎれてしまうのであった。

ただ養成所は公立（府立か市立かは定かでない）であり授業料は安いか又は無料というタメノ様の記述と、この柳北小学校関係が公立乃至は公立的性格の移動をみせているのが残された一筋の糸のつなぎ目と思われるところでもあったが。

（貞静保育専門学校）